

浄土



森 敦

浄土 じょうど

一九八九年六月三十日 第一刷発行
一九八九年十二月二十五日 第四刷発行

著者——森 敦 もり あつし

© Tomiko Mori 1989, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—二 郵便番号二三 電話東京三—五—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一七〇〇円(本体一六五〇円)

落し本・乱し本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-204241-X (文1)

裝
幀

司
修

装
幀

司
修

淨 土

淨 土

そこを鍾路通りといったのは、李朝時代の古い鍾堂があつたからである。京城は城というごとく広大な街の全域を包んで城壁がめぐらされ、そのほとんどは潰えているが、なお痕跡を残していた。東西南北に城門があり、朝夕その鍾によって城門を開き、また閉ざすために造られたという。むろん、響きは広大な街の全域から聞かれねばならぬというので、鑄造された鍾は大きく、あまりに大きすぎたので持ち上げる事が出来ない。みなして騒いでいると、見ていた小童がまず竜頭に横木を通し、それを梁にして堂を建てよ。下を掘って撞木で突けば鳴ると言った。果たして言うがごとくであつたから、みなはその智に驚き且つ怖れて、小童を生き埋めにした。爾来、鍾は小童の慟哭となつて響くようになったので、それなりにされてい

ると聞いた。

わたしはこの鍾路通りの表から、ちょっとはいったところにある鍾路小学校に通っていたので、行き来によく鍾堂を覗いた。朽ちかけた格子の中は薄暗く、縁まで盛り上げられた小石の上に、堂いっぱいの大きな鍾が据えてある。緑青が吹き出ていて、今日は今日で昨日見たときとは違った模様が、意味ありげに現れて来るように面白い。

「敦ちゃん、なに見てるの。なにかあるような気がするんでしょう。やっぱり恐いのね」

潑刺とした声だった。大谷という女の子だと思った。色白で目のぱっちりした、笑えば臍へその浮かぶお下げの可愛い子である。声を掛けられるのは嬉しくないことはないが、この子が敦ちゃんと呼ぶので、女の子がわたしのことをみなそう呼ぶようになったのだ。

「恐くなんかないさ」

むろん、恐いもの見たさもあったからそう答えたのである。しかし、大谷という女の子は笑って引き下がるうとはしなかった。

「恐いから覗かずにいられないんじゃないの」

「恐くないから覗いてるんじゃないか」

「あァら。ならどうして、いつだって覗くの。わたし、ちゃアんと知ってるんだから」

わたしは招かれて金浦空港に降り立ち、やがて名も韓国のソウルと呼ばれるようになった京城を目のあたりにしたとき、見事な変貌と発展に別世界を見る思いがした。韓国の人々はみな自信に満ちている。しかも、案内の韓^{ハル}さんは心優しく親切で、訊けばなんでも答えてくれる。車窓から見覚えのある建物を見いだし、訊くと問いに答えて、そうだと言われるが、それによってかつての思い出が甦るのではない。いよいよ別世界に來たかの感を深くするのみであった。

「きょう一日はどこへでもご案内します。どこか行ってご覧になりたいところがありますか」

韓さんが流暢な日本語で言ったとき、たまたま櫛比するビルの間から、取り残されたような鍾堂が現れた。葺かれた屋根の甍にはもとどおり草まで生えていた。朽ちかけた格子の中も変わってはいないらしい。

「思い出しましたよ。このあたりを鍾路通りというんでしょう」

「そうです。鍾路通りというんです」

いまは韓国語で発音されているに違いないが、韓さんは敢えて韓国語の発音を強いるとはしなかった。わたしが思い出そうとするらしいのをいたわって、慮ってくれたのである。

「そうですか。それにしても、あたりはすっかり立派になりましたね」

「いまでは、ここがソウルの中心街といってもいいところになっていますからね。

もともと違って」

「じゃア、ぼくの通っていた鍾路小学校なんか、もうありませんね」

「それがあるんです。それ、あそこに屋根が見えるでしょう」

そう言われれば、ビルの間に屋根が見えるばかりでない。屋根の下の木造の二階も、緑に塗られたペンキはほとんど剥げ落ちていたが、僅かながらもまだ緋めき合った新築の家の向こうに見える。

「大きな学校だと思っていたが、小さかったんだな。校庭だってそんなに広くなかったに違いない」

「そうですよ。子供のころはなんでも大きく見えるもんですから。でも、よかったじゃありませんか。もう取り壊しに掛かっているので、ひと月も遅れて来られたら、そんな思い出もなくなってしまうとこでしたよ」

「思い出も？」

韓国人はかつての日本統治のころを日帝時代と呼んで憎んでいるばかりか、日本人が韓国名を日本語読みにすることを嫌っている。しかし、韓さんには寛闊なものがあって、わたしが思い出の中に広がって行くのを妨げなかった。

「わたし、ちゃんと知ってるんだって？ どうしてぼくのことばかり見てるんだ」
わたしは大谷という女の子に言った。

「敦ちゃんのことばかり見てなんかいいわ」

「見てなんかいいなくて、どうしてちゃんと知ってるんだ」

「ちゃんと知ってるから、ちゃんと知ってるんだわ」

「だいたい、きみはお寺の子だろう。お寺の子が男の子を見てるなんて、おかしいぞ」

かつて永楽町といわれたところに西本願寺の別院があった。もし大谷という女の

子がそこから来るなら、ひょっとするとやんごとなき血筋の子かも知れないと母が言っていた。しかし、わたしはただ大谷という女の子が、お寺の子と言われるのを嫌っていたから、お寺の子と言ったまでである。

「あら、わたしお寺の子なんかじゃないわ。それ、もうひとりの大谷という女の子。あの子は遠い海の向こうから来たのよ。お寺の子はあの子」

実際、もうひとり大谷という女の子がいた。その子も利発そうないくるしい子だが、潑刺としたこの子に比べれば淑やかで、母の言うような血筋の子はその子かも知れないという気もした。

「だって、きみはいつもいつもお寺のほうから来るというぞ」

「そりゃア、そうでしょ。わたしのところもお寺の近くにあるんだもん」

「だったら、どうしてあの子と一緒に来ないんだい」

「わたし、ひとりぼっちなの。だから、ひとりぼっちでいるのが好きになったの。あら、みんなが来るわ。わたし先に行くわよ」

大谷という女の子は走りだし、わたしが校門にはいったときには、校庭には炒り豆をころがすように子供たちが走り回って、どこにいても分からなかった。

「敦ちゃん」

女の子の笑ったような声がする。しかし、もう大谷という女の子ではない。

「言うな」

と、わたしはいささか得意でもないではなく、手を上げて押さえるようにするが、

「敦ちゃん」

と、まただれか女の子が言うのである。その癖、授業がはじまると、大谷という女の子はわたしの右隣の机にちゃんと掛けていて、わたしの左隣の机に掛けている吉川という女の子に笑顔で目配せしている。吉川という女の子は李王職の高官の娘で、大谷という女の子より面長だが、これも色白で可愛く、二人は大の仲好しである。二人は先生のいるときさえ、よく先生の目を盗んで笑顔で目配せする。またまわたしの机が二人の間にあるだけのことだ。そう思うものの、そう思っていないらなくなりもする。そう、こんなこともあった。校庭の周囲にはアカシアの樹がある。女の子たちは葉を^{しじ}抜き、抜き取ったその茎を編んで籠などを造る。アカシアの白い花を盛ったそんな籠がわたしの机に置かれていたりした。みなは二人の仕業

と思ったに違いない。わたしもそう思った。もしわたしが勇敢な子として知られていなかったら、苛められていただろう。それでいて、どうしてわたしは二人とあんな忘憂^{ぼうゆう}里なんかまで、蕨取りに行ったりしたのか。はっきりと覚えてはいないが、こっそり誘われて、いやとも言えず返事をしかねているとき、大谷という女の子から、

「みなに知られて、なにか言われるのが恐いんでしょ」

とかなんとか、言われたからではないかと思う。

「恐くなんかないさ」

恐くはないが恥ずかしいと思う心が、わたしにはあった。しかし、恥ずかしいとはなお更言えなかった。恥ずかしいとは女の子の言うことで、恐いというよりもと勇敢でないような気がしたからだ。

「じゃア、連れて行って。わたし蕨取りに行きたいんだけど、ほんとに恐いのよ」

「恐いのか」

わたしはいささか優越感を覚えずにいられなかった。

「それなら、きつと吉川さんも来るわ」